

# シンポジウム「今日における環境問題への挑戦」

## 特集にあたって

八木健三

一九七二年ストックホルムで開催された「人間環境国連会議」は世界の人びとの目を、地球規模の環境問題に注がせる画期的な会議となった。この会議のスローガン“Only One Earth”（かけがえのない地球）は人びとの心に強くひびき、われわれの住む惑星への関心を大いに高めたのである。

この会議がストックホルムで開催されたのは、それまでにおけるスウェーデン国民全般の環境問題に対する意識が、他の国々と比較してもきわめて高かったことによることは、自明のところであった。

私の狭い経験からも、スウェーデンへの何回かの訪問のたびに、その事実を自聞する機会があったが、とくに一九八七年の訪問では、自然保護関係の方々との交流を通して、同国民が自然環境の保全にどのような関心を寄せていることを、痛感させられたのであった。

したがって、昨年の暮スウェーデン王立理工学アカデミーから北海道に対し、「一九九〇年三月カール一六世グスタフ国王の札幌ご来訪の際、スウェーデンと北海道共催の環境問題に関する国際シンポジウムを開催してはどうか。これは国王ご自身のご希望によるものである」との申し入れがあると伺ったとき、少なからぬ感銘をうけたのであった。

これに対し、北海道側としては早速北海道、北大、北方圏センターなどが中心となり、その対応を検討

した結果、北方圏センター東條猛猪会長を委員長とするシンポジウム実行委員会が組織され、その構成メンバーには道、北大、北方圏センター、スウェーデン交流センター、北海道スウェーデン協会などとともに、北海道自然保護協会も加わった。

スウェーデン側と実行委員会との間の何回かの交渉により、「スウェーデン側からは四名、日本側からは二名の講演者を出す。本来は討論を行うべきであるが、時間的制約のため、スウェーデン側四氏の講演に対しては、日本側からはそれぞれコメントーターを出す。座長は瑞日研究開発基金名誉総裁A・イベロート氏と北大工学部丹保憲仁教授があたり、用語は英語と日本語とし、同時通訳を行う」などの基本方針が決定した。

これに基づいて具体的な意見発表者として、スウェーデン側からはストックホルム環境研究所副所長L・クリストファーソン博士（「環境とエネルギー：地球的規模の挑戦」）、スウェーデン王立農林アカデミー会長R・スコツテ教授（「酸性雨と森林」）、スウェーデン国立環境保護委員会委員長V・ポールソン博士（「環境政策の発展：スウェーデンの経験」）、WWFスウェーデン事務総長J・ウォールステット氏（「自然保護：WWFと地球規模の保全」）、日本側からは北大水産学部角皆静男教授（「地球環境を守る海」）、北海道保健環境部長栗村幸雄博士

（「北海道における環境問題への取り組み：考えは地球規模で、行動は足もとから」）が選ばれた。又スウェーデン側意見発表に対する日本側のコメントーターとしては、それぞれ北大環境科学研究所山村悦夫教授、北大工学部太田幸雄助教授、北大環境科学研究所小野有五教授、北大名誉教授八木健三があらることとなった。

コメントーターにはそれぞれ対応すべき講演の草稿が予め送付されていたので、それを詳細に検討の上、それに対するコメントと合せて各自の考え方を発表することになった。講演は各二〇分に対し、コメントは五分間という短い時間であった。

なおプログラム編成後、WWF日本の大来佐武郎会長より、コメント発表の希望がよせられたので、八木に引きつづいて発表することになった。

三月十七日には午前中ホテル・アルファ・サッポロの一室で専門家会議があり、お互いに率直な意見の交換を行い、なごやかな雰囲気の中で討論を行った。ここでもかなり意志の疎通がおこなわれたため、午後の本会議がスムーズに進行したと思う。

午後のシンポジウムは同日午後一時三十分から同ホテルで開催され、実行委員長東條猛猪氏の開会挨拶にひきつづき、北海道知事横路孝弘氏の歓迎の挨拶のあと、会場をうめた二百名の参加者の熱烈な拍手のうち、グスタフ国王陛下が壇上に立ち、ストッ

クホルム人間環境国連会議の“Only One Earth”を引き出しつつ、ご自身の環境保全への哲学を語り、このシンポジウムへの期待を表明するお言葉を述べられた。

これからクリストファーソン氏を最初に、熱心な講演とこれを受けたコメントが発表され、途中二〇分ほどのコーヒープレークをはさんで五時まで行われた。これらを行うて、座長のイベロート氏による総括的な要約が行われ、このシンポジウムの意義が述べられた。

最後に「このシンポジウムが、日本とスウェーデンとの環境問題解決に関する協力の第一歩となることを期待します」とのグスタフ国王のお言葉によって、四時間に及ぶシンポジウムは幕を閉じた。

実はシンポジウムに先立ち、午前中の専門家会議で、私は「北海道自然保護協会は本シンポジウムの記録を、日本文及び英文で協会機関誌『北海道の自然』に掲載したいと希望している」と申し出たところ、全員の賛同が得られた。

これによって、本号を「環境問題シンポジウム特集号」として、国王のお言葉を初め、挨拶、講演、コメント及び総括のすべてをここに集録した次第である。

なおシンポジウムの後の経緯についても一言ふれおきたい。

この夜は横路知事主催のスウェーデン国王歓迎晩餐会が同ホテルで開催され、スウェーデンよりのお客様と、日本側参加者との和やかな交流が行われた。

翌一八日には国王は旭川に向われた。旭川国際ハイサスキー大会第一〇回を記念して、旭川市が国王をご招待したのである。一九七七年スウェーデンのモーラにおけるハイサー大会で、九〇キロのコース

を完走されたすぐれたスキーヤーでもある国王は、旭川のコースでも五〇キロのオープントラックを走られた。

さらに快晴の二一日行われた大会は国王の合図で一万余名の参加者がいっせいにスタートした。国王ご自身もこの日は五キロのコースを走られ、表彰式では月桂冠を優勝者に授けられるなど、親しみやすいスポーツマンの一面を遺憾なく発揮され、参加者の大きな拍手をうけられた。

なおWWFのウォールステット氏はシンポジウム終了後ウトナイ湖と釧路湿原でのハクチョウやタン

チョウ保護の視察を希望された。まことに急な申し出ではあったが、道国際交流課及び釧路博物館のご尽力で、一八〜二〇日ウトナイ湖と釧路湿原の両者を視察することができた。ウォールステット氏は「おかげ様で十二分の成果をあげることができました」とたいへん感謝して帰国された。ここに両機関のご好意に対してお礼を申し上げたい。

このシンポジウムによって時かれた環境問題解決への一粒の種子が、さらに進展することを心から期待して、この記録をまとめる。

### プログラム

開会挨拶	環境問題シンポジウム実行委員会委員長 東条 猛 猪
歓迎挨拶	北海道知事 横路 孝弘
国王のお言葉	カール16世グスタフ国王陛下
意見発表	1) 「環境とエネルギー…地球規模の挑戦」 ラルス・クリストファーソン博士 ストックホルム環境研究所副所長 コメント・山村 悦夫氏 北海道大学環境科学研究科教授
	2) 「酸性雨と森林」 レナート・スコッテ教授 スウェーデン王立農林アカデミー会長 スウェーデン政府森林委員会前委員長内閣上席顧問 コメント・太田 幸雄氏 北海道大学工学部助教授
	3) 「地球環境を守る海」 角 皆 静 男氏 北海道大学水産学部教授
	4) 「北海道における環境問題への取り組み… 考えは地球規模で、行動は足元から」 栗村 幸雄氏 北海道保健環境部長
	5) 「環境政策の発展…スウェーデンの経験」 ヴァルフリッド・ポールソン博士 スウェーデン国立環境保護委員会委員長 コメント・小野 有五氏 北海道大学環境科学研究科教授
	6) 「自然保護…WWFと地球規模の保全」 イェンス・ウォールステット氏 世界自然保護基金(WWF)スウェーデン支部事務総長 コメント・八木 健三氏 北海道大学名誉教授 コメント・大来佐武郎氏 WWF-日本会長
要 約	コウ・チェアマン アクセル・イベロート氏 瑞日研究開発基金名誉総裁 コウ・チェアマン 丹 保 憲 仁氏 北海道大学工学部教授
国王のお言葉	カール16世グスタフ国王陛下